

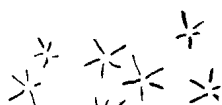
別れぬ理由

渡辺淳一



新潮社

別れぬ理由



渡辺淳一

新潮社

別れぬ理由

発行——一九八七年五月二五日

八刷——一九八七年九月二〇日

定価——一〇〇〇円

著者——渡辺淳一
わたなべじゅんいち

装画者——アンドレ・ブラジリエ

発行者——佐藤亮一

発行所——株式会社新潮社

所在地——162 東京都新宿区矢来町七一

電話——
——業務部(03)二六六—五一—
——編集部(03)二六六—五四—

振替——東京四—八〇八

印刷所——二光印刷株式会社

製本所——加藤製本株式会社

©1987 Jun'ichi Watanabe, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛に送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-32480-4 C0093

目次

風	夜	花	秋	夏	冷	驟	白	春	寒
花	寒	野	色	嵐	夏	雨	夜	雪	月
.....									
283	234	210	176	153	121	91	61	27	5

別れぬ理由

寒 月

賑やかな表通りを曲るとあたりは急に静かになり、闇のなかで街燈が一行に並んでいる。なかに信号が一つだけあり、その赤が寒空のなかで震えている。

速見修平は前方に身をのり出すと、信号を左に曲るように運転手に告げた。

このあたりは世田谷の、いわゆるお邸街である。もともと最近はスーパ―やマンションが建ちはじめ、修平がいま住んでいるところも三年前にできたマンションである。

住宅地だけに高さの規制があつて、三階建ての比較的低いもので、修平はその二階に住んでいる。建坪からするとかなり贅沢で値も張つたが、閑静で私鉄の駅へも七分という手頃な距離なので、思いきつて買うことにした。

車が左へ曲ると前方の左手に、その白いタイル張りのマンションが見えてくる。

「そこで、いい」

修平は車を停めて金を払い、外へ出ると空を見上げた。

車のなかでは見えなかった満月に近い月が、マンションの向かいの櫓けやきの上にかかっている。

先程ラジオで、この冬最大の寒気団が上空をおおっているといっていたが、いかにも寒々とした月である。

修平は首をすくめ、それからマンションの入口を見て、一つ溜息をついた。

いつものことだが、他の女性と逢ったあとと家に戻るときには、あるうしろめたさにとらわれる。これから妻が待っている部屋へ、どんな顔で戻っていかうか。

チャイムを押せば、妻が内側からドアを開けてくれるが、今日のような日は、修平は持っている鍵をつかつて自分で開ける。

いつもなら「ただいま」というのに、多くは無言で妻の横をすり抜ける。

こういうとき、いささか困るのは、家に修平と妻と、二人しかいないことである。一人娘の弘美は湘南の古くからある女子高の寮に入っていて、週末にしか帰ってこない。子供がいればそちらに声をかけて誤魔化すこともできるが、妻と二人だけでは避けようがない。

やむなくうしろめたさをかくすために、早々に奥の間に行って着替え、リビングルームへ戻って夕刊を読む。新聞を開くと顔がかくれるのでいくら救われる。

もっとも妻の房子は、修平のそれらの癖を、すでに見抜いているのかもしれない。

何度か回を重ねていると、自らパターンというものが現れてくる。

だが房子はこれまで、夫に対してあからさまに文句をいうようなことはなかった。

たまに、「あまり無理をしないほうがいいわよ」とか、「今日はネクタイが派手ね」などということはあるが、それが浮気の批判とはいきれない。

はたして妻は気付いているのか、それともなにも知らないのか、修平はときどき妻の顔を盗み見ながら考える。

だが表面の態度を見るかぎりでは、感付いている気配はない。

もし気付いて平静を装っているとしたら、余程我慢強いが、相当したかな女である。

だが、房子はもともと寛大というか、少し醒めたところがあつて、修平の行動にあまり口出ししない。結婚以来、子育ての期間の五年間を除いて、ずっとフリーの記者として働いてきただけに、夫一人にかかずり合つていられなかった、という理由もあるのかもしれない。

それに乗じたというわけでもないが、修平は一年前から、岡部葉子という女性とつき合つていた。房子より六つ下の三十二歳で結婚しているが子供はいない。

麴町の共済病院の整形外科医長をしている修平が葉子を知つたのは、いまから二年前である。そのとき葉子は病院で開かれた健康管理者の講習会にきていた。もともと葉子は栄養士で赤坂にあるホテルのヘルスセンターに勤め、メンバーの健康管理や指導をしている関係でその会に出席したのである。

その後、修平がセンターにときどき顔を出すようになって親しくなり、一年前からは躰からだの關係にまで深まつていた。

葉子の名刺には、ダイエットコーディネイターと書いてあるだけに、やや小柄な躰は均整がとれて若々しい。夫は石油関係の会社に勤めているということだが、彼女だけ見ていると、独身といつてもおかしくない。

ヘルスセンターのメンバーは一流企業の社長や重役が多いが、そういう人達をてきぱきと指導しながら、要領よくさばいていく。

今日、葉子に逢うことは、すでに三日前に決つていた。

それがわかつていたから、修平は今朝出がけに、「今日は遅くなる」とあらかじめ妻に告げた

のである。

そのとき房子は出口に立っていたが、「じゃあ、お食事はいららないのですね」ときいた。

「メーカーと食事をするからいらない」

修平は仕事から、医療機械や製薬関係の会社と際つき合うことが多い。妻にはそれらを一括してメーカーといっている。

「どこのメーカーですか」と、もう一步突っこまれたら、K製薬会社の名前をいおうと用意していたが、房子はそれ以上、きいてこなかった。

もともと房子には、そういう執拗さはなかった。

「いつてらっしゃい」

うしろからの房子の声はいつもと変りなく、とくべつ冷くも優しくもない。

房子は神田にある出版社の女性誌の編集の仕事をしているので、家を出るのはいつも十時を過ぎてからである。

おかげで朝はきちんと朝食をつくって、修平を見送ることができるし、夜は校了の日をのぞけば、六時か七時には戻れる。フリーの記者で時間が比較的自由なせいもあって、共働きが障害になることはほとんどなく、いまは修平もその状態に慣れている。

「じゃあ、行ってくる」

今朝、修平は出がけに、うしろに立っている妻に軽く手を挙げた。いつもなら黙って出るのに、そんな仕草をしたのも、夜、他の女性と逢うといううしろめたさがあったからである。

病院は寒に入ってから忙がしくなっていた。内科はもちろんだが、修平の専門の整形外科でも

スキーで足や腕を折ったり、寒さで腰や膝の痛みをぶり返した患者が増えていた。

仕事のあいだは葉子も妻のことも忘れたが、約束の六時に修平は皇居に近いホテルのロビーに行った。

葉子は時間に正確な女で、六時五分すぎには現れたが、逢うなり、「今日は、九時ころまでに帰らなければなりません」といった。

葉子の夫は石油関係の会社に勤めているときいていたが、それ以上深入りして尋ねたことはなかった。

「家は中野で、修平の家とは少し方角が違うが、いつもは十一時くらいまでに帰ればよかった。

「なにか、用事？」

「ちよつと……」

葉子が口を濁したので、修平はそれ以上きかなかつた。ともに家庭がある男女のつき合いでは、あるところから先に立入らないのが礼儀というものである。

「九時までだとすると、八時半には出なければならぬな」

逢うと食事をしてホテルに行くのがいつものコースだが、九時までではいずれか一方をあきらめなければならぬ。

「お腹、空いている？」

「大丈夫よ」

葉子の答えて、彼女も早くホテルに行くのを望んでいるのだと解釈して、そのままいつもの渋谷のホテルに行った。

時間がなくて慌ただしいと思ったが、それがかえって刺激になったのか、葉子はいつになく燃

えた。なにか時間の短かさを、激しさでおぎなっているという感じであつた。

おかげで、牀のほうの欲求は満たされたが、食欲のほうはおいてきばりをくらってしまった。ホテルを出て葉子と別れたところで、修平は食事をしていくことにした。中華料理でも寿司でも、さし当り腹を満たすものであればなんでもいい。一人で食べるのは侘しいが、いまさら家に戻って、食事を用意しろ、というのも勝手すぎる。

修平は道玄坂に近い鮎屋で寿司を食べてタクシーを拾つた。

葉子のやわらかい肌に接したうえ、お腹もふくらんで、修平は満足していた。

だが家が近づくにつれて、少し帰りが早すぎることに気が付いた。

葉子と逢うときは、いつも帰りは十一時を過ぎていた。むろんメーカーと会食のときは、あとで飲み歩いて十二時を過ぎることもある。妻に「遅くなる」といったのは、そのころに帰るという意味であつた。

だが時計を見ると、まだ九時になつたばかりである。

こんな時間に素面で帰つては、妻のほうで驚く。それどころか浮気をしてきたことを見抜かれるかもしれない。

いっそどこかに寄つて飲もうかと思つたが、一人では気がすまないし、冷え込みも厳しい。そんなことを考えながら迷っているうちに、車は家に着いてしまった。

九時を過ぎたばかりだが、マンションの廻りは静まり返り、管理人室の小窓にはカーテンがかつてゐる。それを横目で見ながら、修平は早く帰つてきたいわけを考えた。

「メーカーのほうで急用ができてね」

この理由は一見よさそうだが、接待する側が急用で中止するところが、少し不自然である。「一緒に行った男が具合が悪くなつてね」

これでは、男の名前から容態まできかれると、ボロを出すかもしれない。「明日早く、手術の予定が入ったので」この理由が一番無難かもしれない。

考えているうちに二階に着いた。チャイムを押すか、自分の鍵で開けるか、迷いながらドアの前に近付くと、郵便受けに、夕刊がさし込まれたままになっている。

妻がとり忘れたのか、暢気な奴だと思つてドアをあけると、なかは真暗である。

すぐ明りをつけて見廻すと、部屋はきちんと整頓され、カーテンも閉められたままである。

「俺のほうが、早かったのか」

妻と顔を合わせずにすんだことに、修平はひとまず安堵した。

このままウイスキーを飲みながら、テレビでも見ていたら、彼女と逢つてきたことはわからずに済む。

奥の部屋に行き、スーツを脱いでパジャマとガウンに着替え、再びソファに戻ると、テーブルの上に、娘の弘美からの手紙が置いてある。

すでに封が切れているので開いてみると、妻へのバースデー・カードである。

「いつまでも元気で、素敵なママでいて下さい」と記し、その横に、「今度、ローソクを三十九本持つていきます」と書いてある。

修平はそれを見て、妻が二日後に三十九歳になることを思い出した。

「あれも、あと一年で大台か……」

修平は妻の七つ上の四十六歳だが、これで同じ四十台ということになる。

「早いなあ……」

ウイスキーを飲みながら考えていると、妻が少し哀れに思えてきた。

これまで妻は仕事はしてきたが、恋らしい恋はほとんどしていないはずである。

強いてしたとすれば修平との婚約時代だが、それもせいぜい一年にすぎない。

あとは子供を生み、働いてきただけである。好きで仕事をしているとはいえ、これで四十になって老けていくのでは可哀想である。

修平がこんなふうにいるのは、今夜、葉子と逢ってきたせいもある。自分だけいい思いをして、妻は遅くまで働いているのだと思うと、申し訳ないような気がしてくる。

「少し遊んだらいいのに……」

バーズデー・カードを見ながらつぶやくが、房子に遊びは似合わない。

外見は細っそりして上背もあり、中年の女性にしてはスタイルはよく、顔もまずまずである。

二カ月前に用があつて外で待合させたとき、コートの裾をひるがえして近付いてきた姿は颯爽さつさうとして、三十半ばかりと見間違ふほどだった。

房子の欠点は、外見よりむしろさばさばした性格にあるかもしれない。頭は切れるし仕事もよくできるようだが、その分だけ男勝りで、いささか情緒に欠けるところがある。

いずれにせよ、あまり男好きするタイプではない。

とりとめもなく妻のことを考えながらウイスキーを飲んでみると、十時半を過ぎた。

「残業なのか……」

房子が遅くなるときは必ず事前にいっていく。「十時になります」というと、そのとおり十時に戻ってくるし、十一時というとき十一時にドアをあける。その正確すぎるころも少し面白くな

いところである。

そのままさらにウイスキーを飲みながらテレビを見てみると、十一時を過ぎた。情事のあとに飲んだせいかな、アルコールの効きが早い。

「しかし、遅い」

帰ってきたときには、妻がいないことに安心したが、いまはそのことに少し腹を立てている。

「じゃあ、先に寝るか」

一人でつぶやきながら、もう一度グラスを手にしたとき、電話のベルが鳴った。

冬の夜だけに、音がよく響く。少しよろけながら立上って受話器をとると、いきなり男の声がとびこんできた。

「もう、着きましたか……」

「なに……」

思わずきき返すと、「あっ」という声が洩れて電話が切れた。

一瞬、なにがおきたのかわからず、修平は一方的に切れた受話器を持ったまま首を傾げた。

いまの声は間違いなく男の声であった。

三十半ばか、あるいはもう少し若いっているかもしれない。夜のせいかな声はくぐもって忍びやかであった。

そこまで思い返して、修平は切れた電話を振り返った。

「もしかして、あれは妻への電話ではなかったのか」

再びソファに坐って、サイドボードの上の時計を見ると、すでに十一時二十分を示している。修平はしまいかけたボトルからストレートを注ぎ一気に飲み干した。

熱いかたまりが喉を灼き小さくむせる。それがおさまったところで、ソファに坐っていきまた電話のことをもう一度考える。

声は間違いなく、男の声であつた。

その声が「もう、着きましたか」ときいて、すぐ切れた。

初め、修平は間違い電話かと思つたが、それなら「ご免なさい」と、謝ればすむことである。だが電話の主はあきらかに狼狽してゐた。思わず、「あつ」と叫び、そのまま電話は切れた。あの慌てようは尋常ではない。

もし間違い電話でなく、自分にきたのでもないとなると、妻にきた電話になる。

「しかし、妻に何故そんな電話がくるのか……」

「もう、着きましたか」という以上は、それまで妻と電話の主は会つていたことになる。会つたあと別れて、電話をかけてよこしたが、思いがけず修平の声がでたので狼狽した。失敗したと思ひ、驚きの声だけ残して電話を切つた。

修平は煙草を銜えたが、逆さまなのに氣が付いて、慌てて銜えなおして火をつけた。

もしいまの推測が当たっているとすると、妻は今夜、他の男と会つていたことになる。

十一時半になつても戻らないのは、そのせいなのか。

「まさか……」

修平はつぶやくと、首を横に振つた。

妻が自分以外の男と密会する姿など、想像できない。もちろん女性編集者という職業がら、夜遅くまで男性とつき合うことはある。だがそれらはすべて仕事がらみで、色恋沙汰とは無縁である。